明治後期から大正にかけての 都市と農村の関係の変移

—雑誌「斯民」の記事にみる都市・農村観の変移—

The Change of Vision on “town and country” during the Period of Late
Meiji Era and Taisho Era:

Through the Analysis on the Articles of the Journal Entitled “Shi-min”

村上 暁 信*

Akinobu MURAKAMI

I はじめに

近年、「都市と農村の共生」が盛んに議論されている。1998年に提示された全国総合開発計画では、多自然居住地域を創造し、都市と農村が調和した形で国土の保全を促進する、とされている。他にも、農業政策や関連する学界において「都市と農村の共生」は重要なキーワードとなっており、そのあるべき姿について様々な研究、提言がなされている。このような動きは、わが国における農業・農村の位置づけが大きく変化しつつある中で生じてきたものとみることができる。

また、このように「都市と農村の共生」が盛んに議論されるようになった背景には、もう一つ、わが国においては都市計画と農村計画が互いに交わることなく展開してきたという問題意識がある。わが国の都市計画は、明治時代の欧風の都市建設に始まり、明治22（1889）年の東京市区改正設計、市区改正設計の他都市への適用、さらに大正8（1919）年の都市計画法制定による全国での都市計画の実践、昭和43（1968）年の都市計画法改正という流れから展開してきている。一方で、農村計画の歴史としては、明治17（1884）年の興業意見や明治27（1894）年の町村是、明治29（1896）年の適産調にその萌芽がみられ、明治32（1899）年の耕地整理法から本格的に計画として展開してきたとされる。しかしその後の農村計画

における主たる目標は農業生産の基盤整備であり、都市計画制度が対象とする地域とは明確な住み分けを行なっており、互いに交わることはなかったというのが一般的な認識である。このような状況に対して、ドイツやイギリスの都市・農村を一体的に扱う計画制度を紹介して、わが国においても都市農村の一体的な計画制度が必要であるとの指摘もなされている。

しかし、わが国の状況に即した形で「都市と農村の共生」を模索するためには、まず、わが国において都市と農村の関係がこれまでどのように位置付けられてきて、またそれがどのように変化してきたのかについて、歴史的観点から考察する必要があるといえる。都市計画史、あるいは農村計画史に関しては多くの既往研究があるものの、都市と農村の関係についてはこれまでほとんど歴史的考察がされてこなかったといえる。そこで本研究では、「都市と農村」の関係についての歴史的研究の一端として、時期としては明治後期から大正期を、分析対象としては地方改良運動を取り上げて、当時都市と農村の関係がどのように位置付けられていたのかについて考察することを目的とした。

地方改良運動とは、日露戦争の財政的・人的・精神的基盤であった末端の農村が戦後経営の負荷に耐え、国家目的に対する全一的奉仕が実行できるように、行財政と生活習慣を再編成することを

*東京工業大学大学院総合理工学研究科 Interdisciplinary Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology

Key Words : 1) 都市, 2) 農村, 3) 地方改良運動, 4) 斯民

目指すものであった。地方改良運動は政治、経済、文化、社会など多面的かつ総合的な指針として強力に推し進められた「国策」であった。従って、地方改良運動を研究対象とすることで、当時の官の計画思想における都市と農村の位置づけを考察できることが期待できる。また、わが国における近代都市計画のスタートには欧米都市計画の受容があったとされており、その代表的な出版物として内務省地方局が1907年に出版した「田園都市」¹⁾が挙げられている。内務省地方局は地方改良運動を主導していた組織であり、「田園都市」の内容も地方改良運動の影響を大きく受けていることが指摘されている²⁾。またこの「田園都市」は農村計画の歴史においても重要なものとして位置付けられている³⁾。従って、本研究からは、都市計画・農村計画の初期形成期における都市と農村の位置づけについて考察できるものと期待できる。

II 地方改良運動と雑誌「斯民」

明治37(1904)年から翌38(1905)年にかけての日露戦争で勝利を得たわが国は、帝国主義列強に比肩できる国力の充実を急務とした。外債の償却、国家財政の膨張に伴い、戦中の非常特別税は戦後も恒久税として残されて増税が図られた。当時の明治政府はこのような厳しい戦後経営に耐え得る町村自治体制の確立を必要としていた。そのために、国策として町村財政の強化、町村内融和、勧業の推進、勤勉、貯蓄、教育振興、耕地整理・農会等による農事改良などを推し進め、そして町村経済の基礎強化を末端にあって自発的に遂行する人材の育成を通して地方自治を進めようとした。これが地方改良運動と呼ばれる町村行財政の基礎強化運動である。そしてこの地方改良運動の展開を主導したのが内務省地方局であった。

各地方農村でこのような運動を担う人材を育成するために、内務省は「報徳社」に注目した。報徳社は、幕末から明治初期に二宮尊徳の門弟達が始めた運動であり、農民の産業組合的組織であった。その思想は、二宮尊徳の教えた勤勉・儉約・分度・推譲の自己規律によって「経済と道德の調和」を目指すものであった。

明治38(1905)年7月に内務省地方局のメンバ

ーが中心となり、二宮尊徳や報徳主義に関心のある有志の集会が開催された。その際に、同年12月に二宮尊徳の没後50年記念会を催すことが決められた。「二宮尊徳翁五十年記念会趣意書」に発起人として名を連ねているのは、平田東助(前農商務大臣、産業組合中央会会頭)、早川千吉郎(三井銀行専務理事)、岡田良平(貴族院議員、文部官僚)、一木喜徳郎(法制局長官、内務官僚)、久米近彌(農商務省山林局長)、桑田熊蔵(貴族院議員)、鈴木藤三郎(台湾製糖会社取締役)、田村武治(日本精製糖会社社長)、井上友一(内務省地方局府県課長)、清野長太郎(内務省地方局市町村課長)、留岡幸助(巢鴨家庭学校長、社会事業家)の11名である。内務官僚を中心として、他の省の官僚、実業家が主たる構成メンバーとなっていたといえる。同年12月26日に東京音楽学校において二宮尊徳翁50年記念会が500名以上の参加者を集めて開催され、それに引き続いて中央報徳会が組織された。そしてこの中央報徳会により、明治39(1906)年4月23日、二宮尊徳の生誕日を記念して雑誌「斯民(しみん)」が刊行された。

斯民は中央報徳会の機関紙として刊行され、昭和19年9月まで、毎年12~14号(大正6年だけは9号発行)が出版された。記事の多くは、当時の内務官僚や他の省の官僚、地方官僚、研究者、議員、実業家などが執筆している。刊行の経緯や、執筆者に内務省の関係者が多いことなどから、斯民の記事には当時の地方改良運動の思想が大きく反映されているものと考えられる。実際、斯民はこれまで戦前期の内政史研究において多く参照されたほか、都市計画史研究の分野で記事の一部が引用されるなど、当時の政策研究において重要な資料として位置づけられている^{注1)}。また、中央報徳会は大正9年に東京で全国町村長会議を主催したが、これをきっかけにして、翌年には全国町村長会が設立された。この会はその後、全国町村会と名称を変えて今日まで続いている。このことから中央報徳会は当時の政策を研究する上で重要な考察対象であると考えられ、その機関紙であった斯民も研究対象として重要な意義を持つと考えられる。

本研究ではこの斯民を取り上げて、創刊号から

第15編までの記事を主対象にして、当時の都市と農村の関係がどのようなものであり、またどのように変容したのかを考察することとした。尚、次節の分析では便宜上、創刊号から第5編までを前期、第6編から第10編までを中期、第11編から第15編までを後期として考察を進める。

Ⅲ 「斯民」掲載記事の分析

1 記事の傾向

斯民は、明治39（1906）年に創刊されて以降、一年に一編ずつ出版されている。従って、第15編は大正9（1920）年の刊行である。前記の通り各編は9～14号ずつ発行されている。各号は90ページ前後で構成されている。

各号の内容は、全般的には、中央報徳会設立の趣旨である二宮尊徳の報徳思想の紹介やそれに関連した教化の話、地方改良運動の流れに沿った地方財源の強化の話題が多い。また、第一次世界大戦の終結に伴い、第13編以降は戦後処理に関する記事が多くなっている。

各号の中身は、口絵、挿絵、論語、講和、説苑、訪問、史林、思潮、談叢、自治・民生、家庭、教

育・産業、彙報、彙録、遺績、時報、世界之知識、地方改良、といった項目に分けられている。第13編からは、これに読者から寄せられた事例の紹介が加わっている。

第13編以降は事例紹介が多くを占めているため、第12編までを対象に、各記事が取り扱っている内容の傾向を分析することとした。上記の項目の内、口絵と挿絵は単に絵を紹介しているだけなので除き、さらに彙報と時報も集会等の報告が多いので除くと、残った記事は全部で2,801編となった。

この記事の内容を、大きく(1)二宮尊徳の報徳思想、篤志家に関する紹介、青年会、義務教育、婦人教育の充実、といった民衆教化に関する記事、(2)町村是、耕地整理、新しい農業技術の紹介、農会、農業組合、農協、農業教育といった農事改良に関する記事、(3)町村合併、部落有財産の統一、貯蓄組合、地方自治、副業・家庭内工業の勧め等の町村財政の強化と地方自治に関する記事、(4)日本や海外の都市、農村、工場、工業村に関する記事、(5)その他、の計5つに分類することを試みた。工場や工業村に関する記事を内外の都市や農村に関する記事と一緒にしたのは、初期の斯民ではイギリスの田園都市運動に先立つボーンヴィルやポートサンライトといった工業コミュニティの紹介が多くなされており、そのような流れから工業村に関する記事が多かったためである。

記事には、ひとつの記事内であっても、報徳思想から地方財源の強化の話につなげたものや、耕地整理の話から農村のあるべき姿まで述べたものなど、複数の項目にまたがるものも多く見られたが、ここではどちらに力点が置かれているかに着目して分類を行った。分類の結果、比率はそれぞれ23.9%、6.7%、8.5%、5.7%、55.2%であった。この比率は年（編）により変動はしているものの、その変化に一定の傾向はみられなかった。尚、全記事のうち約半分が(5)その他に分類されたが、ここに含まれた記事には、紀行文や、家庭料理の紹介、水害等の災害の話、明治天皇崩御の記事、健康問題に関する記事、随筆文など多様な記事があった。

図1 都市・農村に関する記事の内容の変化
Fig. 1 The change of contents of the articles on town and country

2 都市・農村に関する記事

上記の分類で、(4)に分類された記事は全部で159であった。これらの記事を更に、日本の都市の問題・都市計画についての記事、日本の模範農村・理想的な農村のあり方についての記事、日本の都市と農村の関係についての記事、日本の工場・工業・工業村に関する記事、海外の都市問題・都市計画に関する記事、海外の農村整備に関する記事、海外における都市と農村の関係・田園都市に関する記事、海外の工場・工業・工業村に関する記事の計8つに分類して、編毎の推移をみると図1のようになった。

海外の計画や都市、農村に関する記事は前期から中期にかけては比較的多いものの、後期には数が減っている。日本の模範的な農村の事例や理想的な農村のあり方についての記事は、時期を問わず数が多く、全部で68編となっている。中期から後期にかけては特に全体に占める比率が高くなっている。日本の都市の問題、都市計画や都市と農村の関係についての記述は前期から中期にかけてはほとんどみられないのに対して、後期に急速に数が増えている。

次章においては、ここまでで用いなかった第13編以降の記事も加えて、その内容について考察を行う。

IV 斯民における都市と農村の関係

1 理想的な農村のあり方についての記事

前章で分類したものの中で、日本の模範農村、理想的な農村のあり方についての記事では、協同的農業社会の実現や、矯風すなわち悪習を取り除くこと、篤志家が私財を投じて村民のための施設を建設した例などが紹介されている。ここで紹介されているのはどれも既存農村における農業振興とそれによる地域の繁栄の例である。一例として、戸倉義一「模範の農村」⁴⁾では、著者が菴原村杉山区を視察した内容が書かれている。杉山区はかつては「区民の大半は忽ち生業を失ひ衣食にも窮する」ような状態になっていたのだが、「三十年斯かる惨状を呈した杉山区も一個の片平信明翁が出て二宮先生の主義を実行したため、今は却て全区六十余戸の生産高は数万円の多に上り、全国村

治の模範と称せられ、洋々たる太平の象は洵に一の極楽境を作り出した。」と書かれている。そして前章の1で分類した(1)二宮尊徳の報徳思想の実行、篤志家の活躍、青年会の設立といった民衆教化、(2)町村是、耕地整理、農業組合の設立といった農事改良、(3)町村合併、貯蓄の推進、副業の推進等による町村財政の強化、の3つを实践したことにより村が繁栄した様子が紹介されている。このような論調は第1編～第15編まで変わっていない。ほとんどの記事で、衰退した農村が上記の項目の实践により繁栄した様子が書かれている。そこに都市は登場せず、また村の中心が都市化していくといったことも描かれていない。

海外の優れた農村やその整備のあり方についての紹介の記事でも同様の傾向がみられ、地方改良運動の要素である民衆教化、倹約勤労などが描かれている。鶴見佐吉雄の「伊太利旧ミラン王公の経営せる理想の農村」では、イタリアの農村の優れた点が紹介されているが、旧ミラノ公の篤志によって、様々な施設もでき、農民の家屋も良好なものとなっている様子や、協働することによって農業も発展している様子が描かれている。このような描かれ方にも時期による違いはみられなかった。

2 都市の問題、都市計画についての記事

海外の都市に関する記事は総数で18あるものの、自治制度や道路建設等の事業についての事実を紹介しているのみであり、どういった点が優れているかという評価まではあまりみられない。記事の内容についても時期による論調の違いは特にみられなかった。

日本の都市の問題を扱った記事は、前期から中期にかけてはほとんどみられない。僅かに扱ったものでも、都市の特定の事象を紹介しているだけであり、農村については触れられていない。後期に入ると、第11編第4号から始まる大橋重省の「都市研究の階梯」⁵⁾を含めて、都市の問題を扱った記事が増えている。「都市研究の階梯」は、大橋がアメリカ人Nida著の“City State and Nation”に感化されて都市の話を書いたものであり、欧米の都市研究に沿ったものとなっている。しかし農村との関係については深く触れられていない。都

市についての記事は後期にいくに従って増えており、また分析の仕方も欧米の都市研究に影響を受けたものが増えている。しかし、それらの中で農村との関係について論じたものはみられなかった。

3 都市と農村、田園都市についての記事

第1編第8号において、井上友一は「花園都市と花園農園」⁶⁾と題してイギリスの田園都市論を紹介している。花園都市に「ガーデン、シチー」とルビが振ってあることから、この言葉をガーデン・シチーの訳語として用いていることがわかる。そこではまず、「都会に甚しく人口の集るのを如何に救済せば宜きかと云ふことから花園都市なるものの必要が起って来た」と述べている。井上は、「花園都市」を「農業を中心とした都市を造った」ものであるとしている。従って「花園」を農業の意味で使っているものといえる。そして、「殊に農村に月が冴へ渡って居る有様などは、到底都では見られない景色である。斯う云う趣味は唯農業に依て始めて得られるのである。」とするなど、

表1 都市・農村に関する記事一覧（一部）
Table 1 The list of the articles on town and country

日本の都市の問題、都市計画に関する記事

編	号	著者	所属	記事タイトル
第2編	第2号	天國直嘉	法学博士	都市の植樹事業
第3編	第4号	中川望	内務書記官	工場と都市の改善
第11編	第4号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯
第11編	第5号	田子重省	内務書記官	新に市とされる岡崎の現在及び将来
第11編	第6号	山口正	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其二)
第11編	第6号	大橋重省	東京市庶務課長	都会人の心理
第11編	第7号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其三)
第11編	第8号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其四)
第11編	第10号	大山郁夫	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其五)
第11編	第12号	大橋重省	東京市庶務課長	都市意識の振作
第12編	第3号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其六)
第12編	第4号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其七)
第12編	第4号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其八)
第13編	第4号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其九)
第13編	第4号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其十)
第13編	第5号	大橋重省	東京市庶務課長	都市と養鶏
第13編	第5号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其十一)
第13編	第6号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其十二)
第13編	第7号	大橋重省	東京市庶務課長	都市研究の階梯 (其十三)

日本の都市と農村の関係に関する記事

編	号	著者	所属	記事タイトル
第2編	第3号			都会の活動と田舎の修養
第12編	第9号	浜田富吉	内閣統計官補	都鄙の人口
第15編	第4号	留岡幸助	家庭学校長、本会理事	都市農村発達の調和

海外の農村整備に関する記事

編	号	著者	所属	記事タイトル
第1編	第2号	吉原三郎	内務次官	仏国農民部落の繁栄
第2編	第4号	エリー・カタラン	マローサン組合理事長	仏国の良農村を紹介す
第3編	第9号	アンソニー・ローレン	仏国マローサン村よりの青束	仏国マローサン村よりの青束
第3編	第9号	井上友一	内務省神社局長兼内務省参事官	西班牙の新興村
第3編	第10号	ロッキギー	瑞典の共同事業と基効果	瑞典の共同事業と基効果
第3編	第10号	カクマン・グレー	仏国社会改良協会農業部主任伯爵	仏国植民地の農村組合
第4編	第6号	上杉慎吉	英国	英国の田舎に於ける慈善事業
第5編	第6号	ロッキギー	東京帝国大学法科大学助教授	予の最も親しみた独逸農村
第5編	第6号	長谷川久一	仏国社会改良協会農業部主任伯爵	仏国の地方改良事業
第5編	第8号	ロッキギー	内務書記官	普魯西の内地殖民事業
第5編	第8号	井上友一	仏国社会改良協会農業部主任伯爵	仏国農業組合の趨勢
第6編	第7号	井上友一	内務省参事官法学博士	仏国農業組合の日本趣味
第6編	第7号	沢村真	農学博士	丁抹の小農保護策
第6編	第12号	一木喜徳郎	貴族院議員法学博士	独逸の農村保護協会
第6編	第12号	前田多門	群馬県北甘葉郡長	丁抹に於ける小地主奨励
第6編	第12号	一木喜徳郎	貴族院議員法学博士	米園に於ける農村改良同盟
第7編	第1号	鶴見佐吉雄	農商務書記官	米園田園生活調査委員会の報告
第7編	第1号	有働良夫	農商務技師	丁抹の農村繁栄策
第7編	第2号	生江孝之	内務省嘱託	伊太利旧ミラン王公の経営せる理想の農村
第10編	第2号	中川望	内務省衛生局長	独逸の農政組織並農事団体
第11編	第4号			模範的新農村ボルンビル※

※ボルンビル (Bournville) は工業村として紹介された記事が多いので通常は海外の工業村に分類したが、本記事は新農村として書かれているので海外の農村整備とした。

海外における都市と農村の関係、田園都市計画に関する記事

編	号	著者	所属	記事タイトル
第1編	第1号	白石正邦	文学史	田園都市の創業者
第1編	第8号	井上友一	内務省参事官	花園都市と花園農村
第1編	第9号	長谷川久一	内務省書記官	英国田園都市レッチウォースより
第6編	第8号	水野鎌太郎	内務省地方局長法学博士	内国植民地の訓育事業
第7編	第12号	フレデリック・ハウエ	米国	仏国首都の人口集中と農村の疲弊
第7編	第13号	フレデリック・ハウエ	米国	田園都市は如何にして発達せしか 英国の田園都市

日本の工場、工業に関する記事

編	号	著者	所属	記事タイトル
第1編	第2号	真野文二	文部省実業事務局局長	模範機械工場の設置を要するの議
第1編	第7号	吉岡哲太郎	農商務技師	商工業における日本人の欠点
第2編	第9号	日比野貞恭		丹波の郡製絲会社
第2編	第10号	相田良雄	愛知県農林学校校長	家族主義の伊藤工場
第3編	第4号	山崎延吉	農商務省商工局長	嚆矢製絲会社の主義
第3編	第10号	大久保利武	農商務省商工局長	商工業者と報徳主義
第3編	第10号	手島精一	東京高等工業学校校長	工業教育の要項
第3編	第10号	山内正瞭	長崎高等商業学校教授	予が観た模範工場
第3編	第13号	山内正瞭	長崎高等商業学校教授	三隻造船所の職工待遇
第4編	第1号	大久保利武	農商務省商工局長	農業と工業の密着点
第4編	第2号	山内正瞭	長崎高等商業学校教授	工場改良と職工保護
第4編	第3号	朝吹英二	三井家同族会事務局管理理事	工業振興と地方の産業
第4編	第6号	留岡幸助	農商務省商工局長	日本海沿岸地方の工業
第4編	第7号	留岡幸助		大福長となる工場
第6編	第11号	留岡幸助		出稼きは本場の一特色
第6編	第11号	手島精一	家庭学校校長	推譲に富める製絲会社
第12編	第3号	柴山雄三	東京高等工業学校校長	工業の発展を図るべき好機
第12編	第5号	志立鉄次郎	日本興業銀行総裁	小工業の弊と其改善法
第12編	第6号	志立鉄次郎	日本興業銀行総裁	工業発展策 (上)
				工業発展策 (下)

農村賛美の記述が続く。ハワードのガーデン・シティ論は、ロンドンなどの大都市で当時問題になっていた都市住民の劣悪な環境条件、衛生上の問題といったことを強く意識しており、そのような問題に苦しんでいる都市住民が安価で質の高い住環境を享受できることが重要な要素の一つであった。しかし井上の記事には、そのことにはほとんど触れておらず、その代わりに農業に関することに記述の大部分が割かれている。さらに、花園都市の紹介はすぐに終わり、「以上は花園都市の話であるが、此理想が総ての農村にも段々及んで来る」「花園農村という新時代が起る。」として花園農村の話題に替わる。そこでは、イギリスの模範農村が紹介されており、地主の篤志により、様々な施設が作られ、また共同組合が作られて無駄を省くことにより農村が繁栄する様子が書かれている。これは前記の海外の農村紹介とほぼ同様の内容といえる。「花園都市と花園農村」では、「花園(=農業)」と「農村」の記述は細かくされているが、「都市」の記述だけがほとんどない。その存在を無視しているような構成となっている。

これに対して、第7編第4号で水野鍊太郎が書いた「仏国首都の人口集中と農村の疲弊」⁷⁾では海外の例ながら、都市の拡大とそこへの人口集中により周辺農村が衰退することが書かれている。このように中期には、都市と農村が繋がりのあるものとして書かれた記事がみられる。しかし、そこでは都市と農村のあるべき関係についてまでは論じられていない。

国内を対象にして都市と農村の関係について論じたものは数が非常に少ない。前期において僅かに書かれたものでは、都市と農村は別個のものとして述べられている。しかし、後期になると都市と農村の扱いは大きく異なっている。留岡幸助は第15編第4号において、「都市農村発達の調和」⁸⁾という記事を寄せている。その中で、「乍ら大戦後社会の状態は激変し、都市農村は著しく発達を異にし、又は農村の工業地化を見んとするに至った。」そして「例えば」として、「呉の海軍工廠に於て、廣村及び其付近に分工廠を設けた為に、廣村は攪乱されたといふことである。是れ同村の施設は、農村としては模範とすべきであるが、不意

に工業という強敵の襲来を受け、為に忽ち侵略された形である」「(工業は)敦厚なる農村古来の美風を打壊す所があるから、予め之を防止することが肝要である」と述べている。このように、留岡は農村の側に立ち、都市とその象徴である工業化、工場を敵対視しているといえる。

4 工業、工場村についての記事

工業や工場村についての記述では、前期から中期にかけては、国内・海外どちらについても、工場長の篤志で村が改善されたり、工員が協働する様子が描かれており、模範的な農村の記述に共通するものがある。しかし後期においては、工業界の情勢を分析して、また国際的な立場も勘案して発展させるべき工業分野を選定する必要がある⁹⁾、とするなど、精神論ではない分析的な記事が目立つ。時期が進むにつれて、工業問題が現実の問題として広く認知されるようになり、このような論調の変化が生じたものと考えられる。

V 考察

今回検討の対象とした時期において、前期には井上友一が都市の存在を無視するような扱いをしていて、後期には留岡幸助が都市を敵視するような態度をとっている。井上も留岡も中央報徳会の設立メンバーであり、二人とも内務省地方局に勤務して地方改良運動の推進を支えた人物である。従って、両者の姿勢は、それぞれの時期における斯民やその背景にある地方改良運動における姿勢を表していると考えられる。つまり、1910年頃の段階では、農村に対して都市はその存在をほとんど無視されていたのである。これは、今回対象とした時期の前半には、都市を扱った記事が少なかったことにも表れているといえる。しかし、その後徐々に工業化が進み、さらに都市と農村についての欧米の考え方なども入ってくるに従い、その存在は無視することができなくなった。このような変化は、中期から後期にかけて、都市と農村を繋がりのあるものとして論じている記事が登場していることや、また後期には都市問題を扱う記事が増加し、工業に関する記事の内容が精神論から現実の分析に変化していることにも表れているといえる。しかしそのような状況になったときに、

都市や工業化は、農村の美風を破壊するものとして敵視される存在として位置付けられるようになっていたといえる。

今回の検討から得られた知見でもうひとつ重要なことは、模範とする農村や理想的な農村のあり方については、常に、地方改良運動で推し進められた民衆教化や地方財政の強化に成功した農村が描かれており、その内容については時期による変化がなかったということである。都市に対する見方は15年の間に変化したにもかかわらず、農村に関するイメージは一貫して変化がなかったのである。

ところで、何故、当初都市の存在は無視されていたのであろうか。一つには地方改良運動が、国力増進のためには末端農村の強化が必要であるとの強固な信条を持っていたことが挙げられる。これは単純に、農村に関する記事と都市に関する記事との量の違いにも表れているといえる。しかし、欧米の計画論を紹介する際にも都市の側を無視している。このことについては、もう一つの要因として、日本においては当時、都市問題はまだ深刻化していなかったということが考えられる。井上は前記の「花園都市と花園農村」において、イギリスでは都市への人口流入が進んでいることを紹介した後、「幸ひ日本の人口は四千万で都会の人口は七百万であるから英吉利ほどではない」と述べている。イギリスを初めとする欧米では、1900年代初頭、都市の環境悪化が非常に深刻な問題となり、そのことが近代都市計画誕生のきっかけにもなった。当時、欧米の都市計画については徐々に日本にも情報が入ってきていたが、都市問題がそれ程深刻ではなかった日本ではその根本にあった問題意識を理解することはできなかったと考えられる。そしてそのために、末端農村の強化という日本独自の問題意識に関わる部分だけを抽出した結果、井上のような記事になったと考えられる。

また、ここからは推量の域を出ないが、地方改良運動の中から模範的な農村についての非常に強固なイメージを確立し、そしてそれを一貫して持ち続けたことが、日本においても都市問題や工業化の問題が無視できない存在になったときに、柔

軟に対処できなくさせてしまったのではないだろうか。画一的な模範農村像を必要以上に提示していたために、都市化や工業化を取り込んだ新たな形での模範的な農村像を作ることができず、そのため旧来の農村像を破壊するものとして敵対視するしかなかったのではないだろうか。

最後に、今回検討対象とした時期周辺の他の議論について簡単に触れておきたい。斯民は、留岡が「従来本会では農村を本位とし」¹⁰⁾としているように、農村の側からの議論に特化している。では当時、都市の側からはどのように農村をみていたのであろうか。わが国最初の都市計画法が公布されたのは1919年である。同法の起草者で内務省の初代都市計画課長でもあった池田宏は、都市計画法公布と同じ年に、帝国農会報に「将来の農村計画」^{11) 12)}という記事を寄せている。その中で池田は、都市に起きている問題、農村に起きている問題、都市、農村それぞれの重要性を紹介し、都市計画として取り組んでいる住宅問題、衛生環境の改善、道路建設等を都市だけでなく農村においても積極的に押し進めるべきであるとしている。またこれからの農村は「農業も工業も互に持ちつ持たれつ」で発展していくべきである、と述べている。池田は、都市計画法の起草にあたって、欧米の都市計画を広く研究しており、欧米諸国における都市と農村の議論にも精通していたと考えられる。今後の農村においては住宅問題や衛生問題が重要であるとの指摘や、工業化の中で農村が調和して発展していく必要があるという提案は、旧来の都市の見方や農村の見方にとらわれていない理念の提示といえる。都市を敵視する見方があった一方で、池田のような提案もみられたことは特記すべきことといえよう。

尚、この記事は池田の講演会の内容をまとめたものである。講演会の席上、池田は何度も「私のような微力な者が先輩の皆様に御話す訳でありますから」や「皆様の御専門の方に属すること」という発言を繰り返している。都市計画で行おうとしていることと同じ事を農村においても展開すべきという池田の提案はとても興味深いものであるが、池田の講演時の態度は、農村に関してはそれを専門とする者が多く、池田の理念が一筋縄で

は受け入れられないことを池田自身が認識していたことを物語っているといえる。

また飯沼一省は、池田と同じ内務省都市計画課に在籍していた1925年頃から、小都市論を発表している¹³⁾。そこでは、過大都市の問題を是正するためには、都市の根幹をなす工業を地方に分散させなくてはならないとして、周辺農村も含めた地方小都市の計画的整備を提案している。このような飯沼の理念は、当時の欧米の計画課題であった「工業分散」とそれを適切に導く「地方計画」についての見解に近いものであり、飯沼の計画理念は欧米都市計画に影響を受けたものであったといえる。今回の検討対象とした時期の後半は、このように日本で工業化を見据えた上での議論が本格的に始まる直前にあたる。そのような議論が活発化する前に、農村の側に立ち都市を敵対視する強い意識が、雑誌斯民やそれを支える人々の間に既に出来ていたという事実は、重要な意義を持つことといえる。

今後はさらに、都市を敵視する考え方がその後の都市や農村の計画制度や政策にどのように影響を与えたのかについて精査していく必要があるといえる。そしてそのような作業を踏まえた上で、日本における都市と農村の共生の姿とそれに向けたあるべき制度の形を考究していく必要があるといえる。

補注

注1) 内政史研究会と日本近代史料研究会は1972年に斯民の目次総覧(内政史研究会、日本近代史料研究会編(1972):雑誌「斯民」目次総覧:1906-1944,東京)を編纂しているが、その冒頭で、斯民は

「内務省の政策とその展開過程の研究にとっては不可欠の史料である」としている。また、都市計画史研究においては渡辺俊一(1993):『都市計画の誕生』、柏書房、東京、などにおいて斯民の記事が多く引用されている。

参考文献

- 1) 内務省地方局有志編(1907):『田園都市』、博文館、東京。
- 2) 渡辺俊一(1978):日本の田園都市論の研究(2):内務省地方局有志(編)「田園都市」(明治40年)をめぐって。日本都市計画学会発表論文集、第13巻、283-288。
- 3) 農村計画学会編(1993):『農村計画学の展開』、農林統計協会、東京。
- 4) 戸倉義一(1906):模範の農村。斯民、1(9)、51-57。
- 5) 大橋重省(1916):都市研究の階梯。斯民、11(4)、48-54。
- 6) 井上友一(1906):花園都市と花園農村。斯民、1(8)、20-26。
- 7) 水野鍊太郎(1913):仏国首都の人口集中と農村の疲弊。斯民、7(4)、10-16。
- 8) 留岡幸助(1920):都市農村発達の調和。斯民、15(4)、20-23。
- 9) 志立鉄次郎(1917):工業発展策(上)。斯民、12(5)、6-12。
- 10) 留岡幸助(1920):都市農村発達の調和。斯民、15(4)、20-23。
- 11) 池田宏(1919):将来の農村計画(一)。帝国農会報、9(4)、17-32。
- 12) 池田宏(1919):将来の農村計画(二)。帝国農会報、9(5)、18-28。
- 13) 飯沼一省(1927):『都市計画の理論と法制』、良書普及会、東京。

The symbiosis of town and country has learnt to be an important issue in Japanese planning. Thus, it is needed to reexamine the history of Japanese planning system from the viewpoint of town-country relationship. In this study, regional improvement movement and the journal entitled "Shi-min" were taken up to be studied in the context. When scrutinized the visions on town, country and town-country relationships expressed in the articles of the journals, the following findings were obtained. The town was neglected at first, and then it was seen with aggression. On the other hand, a concrete image on a model country was created and remained with little change in the image.

Key Words : 1) Town, 2) Country, 3) Regional improvement movement, 4) Shi-min

(2005年8月8日 受付)

(2005年9月30日 受理)